

細川常桓殿殺敵數人、而挾二士、投此而死、水產鬼面蟹、俗呼島村蟹、

〔足利季世記高三〕三好筑前堺エ歸事附天王寺崩高國最後事

享祿四年六月四日、三好方ノ諸勢打出、天王寺木津今宮エ取カケ、ル、高國衆モ爰ヲ先途ト防

ケルニ、一番勢浦上、小勢故カケマケ、浦上掃部助打死ス、同手ノ島村彈正ハ、無念ナリトテ、敵ト

引組テ、野里川ニ飛入テ死ケルガ、其淵ヨリ武者ノ顔、甲ニアル蛾〇應仁出來テ、今有リ、所ノモ

ノハ島村蛾ト是ヲ云、

〔攝津名所圖會三〕柏渡

今の野里のわたしに當る

〔日本書紀七〕二十七年十二月、日本武尊〇中比至難波、殺柏濟之惡神濟、此云和多利、

〔日本書紀十一〕三十年九月乙丑、皇后〇磐遊行紀國到熊野岬、即取其處之御綱葉葉、此云筒始婆、而還於是

日天皇伺皇后不在、而娶八田皇女、納於宮中、時皇后到難波濟、聞天皇合八田皇女、而大恨之、則其所

採御綱葉、投於海、而不著岸、故時人號散葉之海、曰葉濟也、

〔勝地吐懷篇加二〕柏濟 攝津

仁德紀によれば、かしはのわたりといふ事は後なるを、景行紀に見えたるは、日本紀を記し給

ふ舍人親王、よくことを得て、後をもてはじめにめぐらし給ふなり、日向とは景行天皇の御代

よりいふ名なれど、神代紀にも此國の名有がごとし、

〔續古今和歌集十〕旅の心を

中納言家持

ふなでするおきつゑほさむ白妙のかしはの渡り波たかくみゆ

〔勝地吐懷篇加二〕右の歌、流布の本は大小二本ともに、かしはのわたりと有、故に爰に別に立之類

字にはかしのわたりとて、香椎の歌とす、夫木抄にも雲葉と注して、おなじくいへり、今案、此